

『禅源諸詮集都序』の訳注研究(五)

石井修道
小川隆

凡例

一、凡例は『駒沢大学仏教学部研究紀要』第五十四号に準ずる。

禅源諸詮集都序目次

〔一〕 裴休の序

卷上

〔二〕 禅源諸詮集とは何か

〔三〕 根源としての禅

〔四〕 五種禅の分類——禅の四種と達磨禅

〔五〕 なぜ教家の人は禅宗を誹謗するか

〔六〕 なぜ教禅一致を主張するか

〔七〕 禅偈を纂集する意図

〔八〕 禅語の性格

〔九〕 禅偈を纂集する必要性

〔一〇〕 禅語と経文との関連を証明する十の理由

〔一一〕 教禅一致の正当性

〔一二〕 いかにして禅宗諸派の教説を整理するか

〔一三〕 禅の邪正を定める基準は経論である

〔一四〕 経の真仮は仏意による

〔一五〕 因明の三量よりみた経文の必要性

〔一六〕 禅宗に対する疑問や批難

〔一七〕 『起信論』の法と義よりみた教禅一致の正当性

〔一八〕 四種の心

〔一九〕 頓と漸とは矛盾しない

〔二〇〕 真の禅は頓悟と漸悟をそなえている

(以上『紀要』第五十三号)

〔二一〕 禅の三宗と教の三教

〔二二〕 息妄修心宗

〔四一〕 二諦と三諦の解釈の相違

〔二三〕 泯絶無寄宗

〔四二〕 三性説の解釈の相違

〔二四〕 真顕心性宗

〔四三〕 仏徳の有無についての相違

〔二五〕 密意依性説相教 (以上『紀要』第五十四号)

〔四四〕 禅の三宗は根本においては一つである

〔二六〕 将識破境教と息妄修心宗

〔四五〕 頓教の二の意味——逐機の頓と化儀の頓——

〔二七〕 密意破相顕性教

〔四六〕 頓漸の種々な解釈

〔二八〕 密意破相顕性教と泯絶無寄宗

〔四七〕 一真心体こそ教法の根源である

〔二九〕 顕示真心即性教 (以上『論集』第二十七号)

〔四八〕 仏が経を説いた本意

〔三〇〕 達磨禅と知の一字衆妙の門

〔四九〕 仏の本意と三種の教

〔三一〕 自性清浄心をいかに修するか

〔五〇〕 仏と衆生、悟と迷との関係

巻下

〔三二〕 絶対の真心 (以上今号)

〔五一〕 迷いの過程——凡夫の相すがた——

〔三三〕 空宗と性宗の十の相違点

〔五二〕 悟りへの道

〔三四〕 法と義の解釈の相違

〔五三〕 悟りと迷いの体系を図示する理由

〔三五〕 性と心の相違

〔五四〕 悟りと迷いの図式

〔三六〕 性の解釈の相違

〔五五〕 悟りと迷いの図式によって反省自覚すべきこと

〔三七〕 智と知の解釈の相違

〔五六〕 修道の心がまえ

〔三八〕 有我と無我の解釈の相違

〔五七〕 むすび(一)

〔三九〕 真理のあらわし方の相違——消極性と積極性——

〔五八〕 むすび(二)

〔四〇〕 名と体の相違

〔五九〕 後記

之門、任學者悟之淺深^{*}、且務圖宗教不斷。亦是此國大法、運數所至、一類道俗、合得普聞。故感應如是。其默傳者、餘人不知、故以袈裟爲信。其顯傳者、學徒易辨、但以言說除疑。況既形言、足以經論爲證。前叙外難云、今時傳法者說密語不^{*}。今以此答也。法是達磨之法、故聞者淺深皆益。但昔密而今顯、故不名密語。豈可名別而法亦別^{*}。

者の之れを悟るの淺深に任すも、且らく宗教の断ぜざるを務め図れり。亦た是れ此の國の大法の運數の至る所、一類の道俗、合に普ねく聞くを得べきものたり。故に感應することは是の如し。其の默傳は、余人知らず。故に袈裟を以て信と爲す。其の顯傳は、學徒も弁じ易ければ、但だ言說を以て疑を除くのみ。況んや既に言に形わせば、經論を以て証と爲すに足るをや、前に叙す外難に云く、「今時の傳法者は密語を説くや不や」と。今ま此を以て答うるなり。法は是れ達磨の法、故に聞者は淺にても深にても皆な益す。但だ昔は密にして今は顯なれば、故に密語と名づけず。豈に名別なれば法も亦た別なるべけんや。

*標||標(底) (高) (弘)、以下同。*異||二(高) (弘) (明)。*名||名也(高) (弘) (明)。*靈||ナシ(高) (弘) (明)。*心||心也(高) (弘) (明)。*諭||諭(底)。*引||引(高) (弘) (明)。*諸緣絶||絶諸緣(高) (弘) (明)。*問||有(明)。*何以||以何(高) (弘) (明)。*耶||ナシ(高) (弘) (明)。*心||ナシ(底)。*但||即但(高) (弘) (明)。*他||ナシ(明)。*言||悟(高) (弘) (明)。*實||眞實(高) (弘) (明)。*絲||絲也(高) (弘) (明)。*明||ナシ(高) (弘) (明)。*淺深||淺深(高) (弘) (明)。*辨||辯(高) (弘) (明)。*以||可引(高) (弘) (明)。*論||論等(明)。*不||不(高) (弘) (明)。*今||今(高) (弘) (明)。*淺深||淺深(高) (弘) (明)。*而||而(高) (弘) (明)。*別||別也(高) (弘) (明)。*別||別耶(明)。

(1)馬鳴は心を本源として示し、文殊は知を真体として揀び出して示しているのに、どうして破相の党は、ただ寂滅だけを言つて真知を認めようとししないのか。また、説相の家は、凡夫が聖人と異なることにのみ執着して、即仏を認めようとししないのか。今、仏の教えに照らして判定するのは、正しくこうした人の為である。それ故、前に述べたように、インドにおける心の伝授では、そこに經論を兼ねるのが普通であつて異なつた途がある訳では無かつたのに、ただ中国においては、心を見失つて文字に執着し、名辭を本体と思ひなすようになっていたため、達磨は善巧方便で文字を捨てて心を伝え、その名を表して「心は名前である」その本体は無言で示し「靈知は心である」、壁觀(心が壁のようであると觀察する)を喩えて「上に既に引用」諸々の心の攀縁を絶ち切らせたのであつた。

(達磨)、「諸々の心の攀縁を絶ち切った時、さて、(心は)断滅してしまうのか。(慧可) 答う、「諸々の念は絶ち切るけれども、断滅することはできない」。問う、「どのような証拠でもって断滅しないと言うのか」。答う、「ありありと自ずから知るが、言葉では言うことができない」。師(達磨)はそこでそれを印証して言った、「他ならぬそれこそが自性清浄の心である。決して疑ってはならぬ」。

つまり、答えがピタリと合致してはいないうちは、ただ諸々の非あやまりを否定するだけで更につづけて観察させ、けして先に「知」の字を言ってやったりはしない。その人自らが言うのを待つてはじめてそのとおりだと言い、自身でその本体を証明したその上でこれを印証し、のこりの疑いを絶ち切らせるのである。それ故に「黙ったまま心の印を伝える」と言うのである。ここで言う「黙る」とは、ただ「知」の字を言わぬことであって、全くものを言わないわけではない。六代の祖師の相伝は皆なこのようであった。

(2)ところが、荷沢神会の時代になると、他の宗派が競って伝播し、黙ったままの契合を求めようとしても、機縁は契わなくなっていた。また、神会は、達磨が言った「懸つりかぶった糸のようだ」と言う予言(達磨は「吾が法は第六代の後は、(それを伝えられた人の)命が懸糸のように危うくなる」と言った)を思い起こした。そこで、神会は宗旨が絶滅してしまうことを恐れ、かくして「知の一字衆妙の門」とはつきりと口に出して説き、修行者の悟りの浅い深いはともかくとして、とりあえず根本の教えが断絶しないように務めたのである。一方、この国の大法の展開の必然として、ある種の道俗たちも、それを普ねく聞くことができ段階になっていった。それ故にこのような感応が起こったのである。黙ったままに伝えるものは、他人には知ることができないから、袈裟を証拠の品とした。頭あらかに伝えるものは、学ぶ者も見分けがつき易いので、ただ言葉で疑いを除くのみであった。まして言葉に表されたものは、経論で証明とすることができないか(前に述べた外からの非難に、「今時の法を伝える者は秘密の言葉を読くか」というのがあった。今これをもってその答えとする。法は達磨の法であるから、聞く者は深淺にかかわらず皆な利益を受ける。ただ昔は秘密であったものが今は頭あらかわとなっているので、それ故に密語とは名づけけない。名が別であるからといって、どうして法も別であろうか)。

(1) 馬鳴は……二九段およびその注(20)参照。また、一七段とその注(9)にも示したように、『起信論』の「立義分」の「言う所の法とは衆生心を謂う。是の心は則ち一切の世間法と出世間法とを撰すれば、此の心に依りて、摩訶衍の義を顕示すればなり。何を以

ての故に。是の心の真如の相は即ち摩訶衍の体を示すが故なり、是の心の生滅の因縁の相は能く摩訶衍の自の体と相と用とを示すが故なり」(岩波文庫本二三頁)を踏まえる。馬鳴については、一段注(8)参照。同注に馬鳴と『起信論』の関係についても触れておいた。『円覚経大疏』の宗密の「序」の「常樂我淨は仏の徳なり。一心に本づく」(統蔵経一四一〇八左下)を『大疏鈔』卷一上に積していう。「疏に一心に本づくとは、上に引く所の論の中の真如の四徳の文なり。是れ立義分の中に、論主は総じて一心を立てて本と為す。中に於て、真如、生滅の二門有り。心真如は常等の四徳を具す。心生滅の中に始本不二を究竟覚と為すも、亦た是れ四徳なり。『勝鬘』等の意も皆な然り。故に知りぬ、倒正の常等も並な心を離れず。仏も亦た一心にあらざるは無し」(同二〇八左上)。論主はもちろん『起信論』の撰者の馬鳴をさす。

- (2) 文殊は知を……『華嚴経』卷一三の菩薩問明品の文をさす。二九段およびその注(22)に詳細に述べられているのを参照されたい。
- (3) 破相の党……密意破相顯性教をさし、二七段にその説を示す。集団としては、三論宗を中心に考えている。
- (4) 説相の家……密意依性説相教をさし、二五段にその説を示す。集団としては、法相宗を中心に考えている。
- (5) 前に西域の心……一段をさす。
- (6) 善巧善巧方便のこと。九段注(2)参照。
- (7) 但だ此方は……『円覚経大疏』卷上一に、法蔵の五教判の頓教を説いている。「四に頓教とは、但だ一念生ぜざるを即ち名づけて仏と為す。地位漸次に依らずして説くが故に立てて頓と為す」(『思益』に云く、「諸法の正性を得る者は、一地より一地に至るにあらず」)。「楞伽」に云く、「初地は即ち八と為し乃至所有無きに何ぞ次せん」(『楞伽』に云く、「初地は即ち八と為し乃至所有無きに何ぞ次せん」)。総じて法相を説かず、唯だ真性のみを弁ず。一切の所有は唯だ是れ妄想なるのみにして、一切の法界は唯だ是れ絶言なるのみ。五法・三自性は皆な空にして、八識・二無我は都て遣る。教を呵し離を勧め、相を毀ち心を涙ず。心を生ずれば即ち妄にして、生ぜざれば即ち仏なり。亦た仏も無く不仏も無く、生も無く不生も無し。浄名の黙住の如きは、是れ其の意なり。問う、「此れ若し是れ教ならば、更に何ぞ是れ理ならん」(『楞伽』に云く、「此れ若し是れ教ならば、更に何ぞ是れ理ならん」)。答う、「頓に此の理を詮すが故に頓教と名づく」。別に一類の念を離るる機のために、故に亦た相入空と有なり(『楞伽』に云く、「頓に此の理を詮すが故に頓教と名づく」)。別に一類の念を離るる機のために、故に亦た相入空と有なり(『楞伽』に云く、「頓に此の理を詮すが故に頓教と名づく」)。(統蔵卷一四一一六右上)。この文を『円覚経大疏鈔』卷三上に積しており、既に二七段の注(10)および一六段の注(8)に引用した。その最後の一部は次のようになる。「即ち禅宗に順ずるとは、達磨大師の心を以て心に伝うるとは、正しく斯の教を用うるなり。若し一言を指して以て直に即心是仏を説くにあらずんば、必要は何に由りてか伝うべけん。故に無言の言に寄せて、直に言絶の理を詮わすなり。教も亦た明らかかなり。南宗の禅門は、正しく是れ此の教の旨なり。北宗は漸に調伏すると雖も、然も亦た名言に住まらず。皆な頓教を出でざるなり。故に禅宗に順ずると言うなり」(同二六三左上)。同様の文が『略疏』卷上一(同卷一五一六〇右下)と『略疏鈔』卷四(同二四右下)にも見える。これらの説は、元來、澄観の『演義鈔』卷八(大正卷三六二a b)による。なお、以心伝心不立文字の語釈については、一段とその注(13)および一六段とその注(8)を参照。また、『裴休拾遺問』(前掲書)三一頁参照。

- (8) 靈知は是れ心なり崇禎元年(一六二八)の朝鮮本や元祿十一年(一六九八)本(大正蔵経甲本は「知是体也」に作り、鎌田本もこ

れに従う。

(9) 上に引きし……二六段およびその注(20) 参照。

(10) 「諸縁の絶する……既に二六段とその注(20) および二九段の注(7) に指摘するように、以下の問答は『伝燈録』卷三の菩提達磨章に引用されるもの。『別記』に云く、師、初め少林寺に居すること九年なり。二祖の為に説法す。祇だ教えて曰く、「外は諸縁を息め、内心は喘ぐこと無く、心は牆壁の如く、以て道に入るべし」。慧可は種種に心性の理を説くも道は未だ契わず。師は祇だ其の非を遮するのみにして、為に無念の心の体を説かず。慧可曰く、「我れ已に諸縁を息む」。師曰く、「断滅を成し去らざること莫しや」。可曰く、「断滅を成さず」。師曰く、「何を以て之れを驗し、断滅せずと云うや」。可曰く、「了了として常に知る。故に言の及ぶべからず」。師曰く、「此れは是れ諸仏の伝うる所の心の体なり。更に疑うこと勿れ」(禅文化研究所本三三頁)。宗密の壁觀の解釈に関して、この『別記』を問題にしたのが、柳田聖山『初期禅宗史書の研究』(前掲書)四二六―八頁である。

(11) 自性清淨の心〓前段を踏まえて底本は「自性清淨」に作るも、他本により「心」を補う。前段の『別記』では「諸仏所伝心体」に作る。

(12) 黙して心印を伝う〓『円覚經大疏』卷上二の「八の修証階差とは、謂く、若し但だ教文のみに約せば、唯だ義解のみを生ず。詮を忘れて修証するに、復た其の門有り」(統藏卷一四―一九左上)を『大疏鈔』卷三下に「禅宗を叙ぶ」として釈して言う。「初中に二分つ。初めは前を躡み後を標す。中に於て、初の二句は前の七門を躡み、七門は皆な仏の言教を論ず。教は義を詮にし、教に約して義を解す。但だ是れ聞慧の境なるのみ。設し自ら義に依りて、觀察思惟するも、思う所の義も亦た唯だ思慧の境なるのみ。皆な未だ是れ縁を忘れて寂照することあらず。若し上上根智ならば、即ち言に即して言を忘れ、相に即して相を忘る。此に復びは論ぜず。今ま中下の流の為に、須く機を忘れ志を寂するの方便をもて慧を發し証に契うの玄門を開くべし。故に西域・東夏に、上を承けてより已來た、斯の宗有り。已下の二句は後を標す。詮を忘る等と言うは、意は上の釈の如し。詮とは、詮量揀択の謂なり。即ち能詮の教なり。忘とは、即ち『周易略例』の中に、言を將って象を顯わし、象を得て言を忘れ、象を以て意を顯わし、意を得て象を忘る。筌蹄を以て魚兔を取るが如き等、前に已に釈有り。復た其の門有りとは、必ずしも經論を攀縁せず、自ら黙して心印を伝うる門有るなり」(同一二七五左上)。因みにここに引く王弼『周易略例』明象の釈は、『大疏鈔』卷一下(同一二二二右下―左上)に見ゆ。

(13) 荷沢の時〓荷沢神会の知の主張については、特に一二段の注(3) 参照。

(14) 達磨云く……同様の文が、一段の注(15) の達磨伝に出づ。『神會語録』の達磨章に、「第六代の後に至りて法を伝える者は、命は懸糸の如し」(鈴木・公田校訂本五四頁)とある。同文は『裴休拾遺問』(前掲論文)二五頁にも出づ。

(15) 知の一字……二四段およびその注(14) と二九段の注(22) 参照。『円覚經大疏鈔』卷一上には、「知の一字、衆妙の門。恒沙の仏法は此に因りて成立す」(統藏卷一四―二二三右下)とある。また、「善男子。無上の法王に大陀羅尼門有りて名づけて円覚と為す」の經文の「門」を『大疏』卷上三に釈して言う。「門とは、是れ出と入との義あり。出とは、一切の染淨の諸法は、皆な円覚より流出す。淨より出づるは次の文の如し。染より出づるは下の文の如し。入とは、若し円覚を悟らば、則ち百千万法は悉く皆な悟入す。故に

下の文に云く、覚円明の故に心清浄を顕わす。乃至、徧満等なり。是に知りぬ、万法を了らんと欲せば、須く円覚の中より入るべし。又た本より末を起すを出と爲し、末を撰めて本に帰するを入と爲す。之れに迷わば則ち出、之れを悟らば則ち入なり。出と入との義有るが故に名づけて門と爲す。此中の門とは、是れ根本の義なり。世法の門は浅く室は深きと同じからず。故に『宝積経』に次前を連ねて云く、是の門に由り故に廣大差別の覺慧を出生す。此は則ち無門の門なり、門清浄なるが故に。形相の門は、則ち門にあらずと爲す。言う所の門とは、猶お虚空の如し。一切諸法は虚空に依りて生滅有り。又た荷沢は知の一字、衆妙の門と云う。皆な根本を説く。名づけて円覚と爲すとは、正しく其の属する所を指すは、本体に当るなり。義は題中に具す。二は徳用を彰わす」(同―一三〇右下―左上)。「略疏」卷上一(統藏卷一五―六三左上)に同様の文がある。

(16) 宗教＝根本の教えの意。religionの翻訳語としての意味ではない。『裴休拾遺問』(前掲書)二八頁にも出づ。

(17) 袈裟を以て……一六段およびその注(7)と六段の注(2)に既出。『大疏鈔』卷三下の慧能伝にもいう。「後に嶺南新州の盧行者なるもの有り。年二十二にして来たりて大師に謁す。初め作仏の語を答えて、与に師心に契う。米を舂つき偈を題す。師資道合す。後に乃ち三夜共に語り、直に見性を了る。遂て密語を授け、付するに法衣を以てす。夜に自ら送り、九江口を過ぎ、嶺南に向わしむ。後に曹溪山に在りて、禪を開き宗旨を弘揚するが故に、時に南宗と号す。其の神秀等の十人は、証悟未徹と雖も、大師許して云く、「各々一方の師と爲すに堪えたり」。秀、後に嵩山に於て、大師の宗教を伝え、帝の師と爲り、勅して大通禪師と諡す。時に北宗と号す。故に云く、南北に又た分かる、と。余は別卷の如し。慧能第六。△始興・南海の二部(郡)に在り。得来りて十六年、竟に未だ開法せず。因みに広州の制止寺に在りて、印宗法師の『涅槃経』を講ずるを聴く。夜に諸僧と風の幡竿を動かすの義を論ず。法師竊に聞きて細かに問うに、是れ東山の門下にて便ち刺頭を爲し、逆に曹溪に帰るを知る。二十日の夜、後に印宗自ら道俗百余人と往詣して禅門を開かんことを請う。神龍元年(七〇五)、勅して請するも入らず。兩度勅書して云云、と。襄州神会有り。姓は嵩。年十四にして往きて謁す。因みに無位を本と爲し、見は即ち是れ性なりと答う。諸難を校試し、夜喚びて審問す。兩心既に契い、師資道合す。神会北遊して、其の聞見を広め、西京に於て受戒す。景龍年中(七〇七―一〇)、曹溪に却歸す。大師は其の純熟せしことを知り、遂て黙して密語を授く。達磨の懸記に縁るに、六代の後、命は懸糸の如し。遂て法衣を將って山を出ださず。能大師説法すること三十七年なり。七十六にして、先天二年(七一一)八月三日、滅度す。元和十年(八一五)に至りて、勅して大鑑禪師と諡し、塔を元和廬(盡)照と号す」(統藏卷一四―二七七右上下)。

(18) 前に叙す外難……一六段をさす。

〔三一〕 自性清浄心をいかに修するか

問、悟此心已、如何修之。還依初説相教
中令坐禪否。答、此有二意。謂昏沈厚

問う、此の心を悟り已りては、如何が之れを修するや。還お初めの説相教の中に依つて坐禪せしむるや。

重、難可策發者*、掉舉猛利、不可抑伏者*、貪瞋熾盛、觸境難可制者*、即用前教中種種方便、隨病調伏。若煩惱微薄、慧解明利、即依本宗本教一行三昧。

如起信論云、若修止者、住於靜處、端身正意、不依氣息形色、乃至唯心無外境界。金剛三昧經云、禪即是動。不動不禪、是無生禪。法句經云、若學諸三昧、是動非坐禪、心隨境界流、云何名爲定。淨名云、不起滅定、現諸威儀、行住坐臥不於

三界現身意、是爲宴坐、佛所印可*。

據此、則已達三界空花、四生夢寐、依體起行、修而無修。尚不住佛住心、誰論上界下界。前叙難云據教須引上界禪定者、以管窺天、但執一門之說。見此了教所明、豈不懷慚而退。

*昏^レ悞(高)(弘)。*者^レナシ(高)(弘)(明)。*者^レナシ(高)(弘)(明)。*可^レナシ(高)(弘)(明)。*論^レナシ(高)(弘)(明)。
*經^レナシ(高)(弘)(弘)。*印^レ即(高)(高)。*可^レ身(明)(明)。*則^レ即(高)(弘)(明)。*已達^レ以答(明)(明)。*住^レ不住(明)(明)。*禪^レナシ(高)(弘)(明)。*一門^レ一宗^レ(高)(弘)(弘)□宗^レ(明)(明)。*所明豈不^レ理應^レ(高)(弘)(明)。*退^レ退也^レ(高)(弘)。

問う、この心を悟って後に、どのようにこれを修めるのか。なおも初めの説相教に随って坐禅させるのか。

答う、此に二意有り。謂く昏沈の厚重にして策発し難可き者、掉舉の猛利にして抑伏すべからざる者、貪瞋の熾盛にして境に触れて制し難可き者は、即ち前教の中の種種の方便を用いて、病に随って調伏す。若し煩惱微薄にして、慧解明利ならば、即ち本宗本教の一行三昧に依るなり。

『起信論』に云うが如し、「若し止を修めんとせば、静処に住し、端身して意を正して、氣息にも形色にも依らず、乃至、唯心のみにして外の境界無し」と。

『金剛三昧經』に云く、「禪は即ち是れ動、不動不禪は是れ無生禪なり」と。『法句經』に云く、「若し諸々の三昧を学せば、是れ動にして坐禅に非ず。心は境界に随って流る、云何が名づけて定と為さんや」と。『淨名』に云く、「滅定より起らずして、諸々の威儀⁽¹⁰⁾行住坐臥⁽⁷⁾を現じ、三界に於て身意を現わさざる、是れを宴坐と為す。仏の印可する所なり」と。

此れに抛らば、則ち已に三界の空花、四生の夢寐なるに達し、体に依って行を起こし、修して而も無修なり。尚お仏に住し心に住することすらせず、誰か上界と下界とを論ぜん⁽¹¹⁾。前に難じて教に抛らば須らく上界の禪定を引くべしと云うを叙せしは、管を以て天を窺うもの、⁽¹²⁾但だ一門の説に執するのみ。此の了教の明かす所を見なば、豈に慚を懷いて退かざらんや。

答う、これには二つの解釈がある。

(第一)、沈鬱の煩惱(昏沈)が重くて活発になれない者、また心が猛烈に跳ね上がって(掉挙)抑えのきかない者、貪りや瞋りの心が燃え盛り対境に触れて抑制できぬ者、こうした人は前教(説相教)で説く種々の方便を用いて、病にに応じて心を調え収めていくのである。

(第二)、もし煩惱が微かで智慧が明晰であるならば、この直顯心性宗とこの顯示真心即性教の一行三昧に依るようにさせるのである。

このことを、『起信論』には「もし心を止めた状態にしようとするれば、静かな処に身を置き、正身端坐して意を調え、息遣いや見る対象の形色に惑わされず、さらにただ心のみとなって外の境界を無くしてしまふ」と言い、『金剛三昧経』には、「禅とは動であり、動でもなく禅でもないのが無生禅である」と言い、『法句経』に、「もし諸々の三昧を学ぼうとすれば、それは動であって坐禅ではない。心は対境の世界に依じて流れるもの、どうして定と名づけられようか」と言い、『浄名経』に、「滅尽定より起たずして諸々の威儀(行住坐臥のこと)を表し、三界において身体の意図を現わさない、これを宴坐とする。これが仏の印可されたものである」と言っている。

これらによれば、既に三界が眼病の空花のようであり、四生(卵生・胎生・湿生・化生)が夢のように実体の無いものであることに通達しているので、体そのものから行を起こし、修していながらしかも修していないのである。まして仏にも心にも住まらないのに、誰が上界と下界の区別など論じようか(前に「教によるならば上界の禅定を引くべきである」と言う非難を述べたが、それは管で天を覗き見るようなものであり、ただ一門の説に執着するだけのものである。この完全な教えの明らかにするところを見たならば、恥ずかしく思って引下がらぬわけにはいくまい)。

(1) 昏沈…掉挙…『成唯識論』では、二十随煩惱のうち、掉挙・昏沈・不信・懈怠・放逸・失念・散乱・不正知の八を大随惑という。

その中に、掉挙と昏沈に対して「云何なるか掉挙。心をして境に於て寂靜ならざらしむるを性と為し、能く行捨と奢摩他とを障ゆるを業と為す」(小島本一六五頁)とあり、また、「云何なるか昏沈。心をして境に於て堪任無からしむるを性と為し、能く輕安と毗鉢舍那とを障ゆるを業と為す」(同一六六頁)と説明する。また『天台小止観』の正修行に、坐中において止観を修する五意を説く。「一には初心の麤乱を対破するに止観を修す。二には心の沈浮する病を対治するに止観を修す。三には便宜に随って止観を修す。四には定中の

細心を対治するに止観を修す。五には定慧を均齊ならしめんに止観を修す」。この二を説いて、「第二、心の沈浮の病を対治して止観を修すとは、行者、坐禅の時に於て、其の心闇塞し、無記愷槽にして、或時は睡り多し。爾の時应当に観を修して照了すべし。若し坐中に於て、其の心浮動し、軽躁にして安んぜざれば、爾の時应当に止を修して之れを止むべし。是れ則ち略して心の沈浮の病を対治するに止観を修するの相を説くなり。但だ須く善く業と病とを識りて、相對して之れを用うべし。一一に對治するを得ざれば、乖避の失あり」(大正四六―四六七b)とあり、宗密も『円覺經修証儀』卷十八(統藏卷二二八―四九二右)にそのまま繼承する。また、『大疏鈔』卷十一下に相當箇所を「浮沈とは、浮行沈行なり。浮なれば則ち止を修し、沈なれば則ち觀を修す。浮沈の相は、前説に異ならず」(統藏卷一四―四五九右上下)と積す。止とは奢摩他(samatha)、觀とは毗鉢舍那(vipassana)と音寫し、この浮沈は『成唯識論』の掉挙・昏沈に對應する。さらに二〇段およびその注(4)に取り上げた棄五蓋のうち、棄睡眠蓋と棄掉悔蓋について次のように言う。「第三に、睡眠蓋を棄つとは、内心昏暗なるを名づけて睡と爲し、五情暗蔽、支節を放恣し、委臥睡熟するを名づけて眠と爲す。是の因縁を以て名づけて睡眠蓋と爲す。能く今世後世の実樂を破す。此の如き惡法を、最も不善と爲す。何を以ての故に、余蓋は、情、覺するによりて除くべし。眠は死人の如く覺識する所無し。覺せざるを以ての故に、除滅し難可し。菩薩有りて睡眠せる弟子に教えて言えるが如し。「汝起きよ、臭尸を抱きて臥すること勿れ。種種の不淨仮名の人、重病を得て箭の体に入るが如く、諸の苦痛集る、安んぞ眠るべけんや。人の縛せられ、將れ去られて殺さるるが如く、災害至るに垂とす、安んぞ眠るべけんや。結賊滅せず、害未だ除かず、毒蛇と共に同室に居るが如く、亦た陣に臨みて白刃の間にあるが如し。爾の時、云何して眠るべけんや。眠は大暗と爲りて見る所無く、日日欺誑して人の明を奪う。眠の心を覆うを以て識る所無し。是の如く大いに失あり、安んぞ眠るべけんや」と。是の如き等の種種の因縁をもて、睡眠蓋を呵す。無常を驚覺し、睡眠を滅捐し、昏覆無からしめよ。若し昏覆の心重くば、當に禪鎮・禅杖等を用いて之れを却くべし。第四に、掉悔蓋を棄つとは、掉に三種有り。一に身掉、二に口掉、三に心掉なり。身掉とは、身の遊走、諸の雜戲誑を好み、坐は暫くも安んぜず。口掉とは、吟詠を好喜し、諍いて是非を競い、無益の戲論、世俗の言語等をなすなり。心掉とは、心情放蕩・意の攀縁を縱にし、文芸、世間の才技、諸の惡覺觀等を思惟するを名づけて心掉と爲す。掉の法爲るや、出家の心を破る。人、心を撰するも猶お定め得ざるがごとし。何に況んや掉散なるをや。掉散の人は、鉤無き醉象、穴鼻の駱駝の禁制すべからざるが如し。偈に説くが如し。「汝已に頭を剃りて染衣を著け、瓦鉢を執持して乞食を行す。云何ぞ戲掉の法に樂著して、放逸に情を縱にして法利を失する」と。既に法利無く、又た世樂を失う。其の過を覺し已らば、當に急ぎて之れを棄つべし。悔とは、若し掉も、悔無くんば、則ち蓋を成さず。何を以ての故に。掉の時、未だ緣中に在らざるが故に。後、定に入らんと欲する時、方めて前の所作を悔い、憂惱、心を覆う。故に名づけて蓋と爲す。但だ悔に二種有り。一には掉に因り後に悔を生ず、前の所説の如し。二には大重罪を作せる人、常に怖畏を懷きて、悔箭、心に入り、堅くして抜くべからず、偈に説くが如し。「作すべからずして作し、作すべくして作さず。悔惱の火に焼かれ、後生に惡道に墮す。若し人、罪を能く悔ゆるに、悔い已りて復た憂うることを莫れ。是の如くにして心安樂に、常に念著すべからず。二種の悔有るがごとく、若し作すべきを作さず、作すべからざるを作すは、是れ則ち愚人の相なり。心を以て悔いざるが故に。作すまじきを而も能く作し、諸の惡事のみを已に作して、作さざらしむこと能わず」と。是の如き等の

種類の因縁をもて、掉悔蓋を呵し、心を清浄ならしむれば、覆蓋有ること無けん(大正四六一四六四b c)。睡眠は昏沈の重い状態であるから、睡眠と掉悔を昏沈と掉悔に關連して考えてよかるう。この二つの棄蓋についても、『円覚經修証儀』卷一(統藏卷一二八一三六三左上下)にそのまま繼承される。

(2) 貪瞋……前注と同じく二〇段およびその注(4)に示したように、五つの棄蓋のうち、第一と第二が、貪と瞋である。『天台小上觀』に言う。「第一に、貪欲蓋を棄つとは、前には外の五塵の中に欲を生ずることを説き、今は内の意根に欲を生ずることに約す。所謂の行者、端坐して禪を修するに、心に欲覚を生ぜば、念念に相續し、善心を覆蓋して生長せざらしむ。覺し已らば応に棄つべし。所以は何。術婆伽の、欲心、内に発し、尚お能く身を焼けるが如し。況んや復た心に欲火を生ぜば、而も諸の法善を焼かざらんや。復た次に、貪欲の人は、道を去ること甚だ遠し。所以は何。欲は種種惱亂の住処と為り、若し心、欲に著すれば、道に近づくに由無し。欲蓋を除く偈に説くが如し。「道に入る慚愧の人は、鉢を持して衆生を福にすべし。云何んぞ塵欲を縦にし、五情に沈没する。已に五欲の樂を捨つ、之れを捨てて顧みざれ。如何が還りて得ることを欲する。愚なること自ら吐きたるを食するが如し。諸欲は求むる時は苦しく、得たる時は怖畏多し。失う時は熱惱を懷き、一切樂なる時無し。諸欲の思いは是の如し。何を以てしてか能く之れを捨てん。深き禪定の樂を得ば、則ち為に欺かれず」と。是の如き種類の因縁をもて、貪欲蓋を呵すること、摩訶衍の中に呵欲の偈に説くが如し。第二に、瞋恚蓋を棄つとは、瞋は是れ諸の善法を失うの根本、諸の惡道に墮するの因縁、法樂の怨家、善心の大賊、種類惡口の府藏なり、復た次に、行者、坐禪の時に此の人、我れを悩まし、及び我が親を悩まし、我が怨を讚歎すと思惟す。過去未來を思惟することも亦た是の如し。是を九惱と為す。悩の故に瞋を生じ、瞋の故に恨を生じ、恨の故に怨を生じ、怨の故に報を加えて彼を悩まさんと欲す。瞋覺は心を覆う。故に名づけて蓋と為す。當に急ぎて之れを棄つべし。增長せしむること無かれ。積堤婆那の偈を以て仏に問うが如し。「何物を殺さば安穩ならん。何物を殺さば憂い無からん。何物か毒の根にして、一切の善を吞滅するや」と。仏、偈を以て答えて言う。「瞋を殺せば則ち安穩なり。瞋を殺せば則ち憂い無し。瞋は毒の根と為り、瞋は一切の善を滅す」と。是の如く知り已らば、當に慈忍を修し、以て之れを除滅し、心を清浄ならしむべし。摩訶衍の中に、仏、弟子に教えたる呵瞋の偈、是の中に応に広く説けるがごとし(大正四六一四六四a b)。これらの説も、『円覚經修証儀』卷一(前掲書三六三右下く左上)に説かれる。

(3) 本宗本教の一行三昧 本宗は直顯心性宗、本教は顯示真心即性教をいう。一行三昧については、四段とその注(11)参照。この一行三昧は『起信論』の真如三昧・一行三昧をさす。『円覚經大疏』卷上一に、教起因縁の別の十門分別の第九に、「九は、性に稱って深禪を修せしむるが故に。然るに諸家の禪定の門、色の四、空の四を出でず。唯だ『起信』のみ直に真如三昧を修す。此の經は便ち円覺の觀門に入る。三根、漸頓の殊りあると雖も、入る所は円覺にあらざる無し(統藏卷一四一一〇左上下)を釈して、『大疏鈔』卷二上に次のように言う。「疏に九は、……修せしむの下、文に二あり。一に、淺を擧ぐ。諸家の禪定と言うは、一向に心を安んじ念を息むるの門戸を説くなり。色の四、空の四とは、四禪と四空となり。六度中の禪門も亦た只だ四禪等に約し、其の行相を弁す。又た諸經に頓漸、禪定、功用の道理を教説するは、修習を勧讚するの意なり。文も亦た甚だ多し。然るに一性の觀門に於て、別に宗体を立つることあらざるも、又た始終の方便の門戸無し。天台は広く甚深の禪定を明かすも、亦た只だ四禪八定に約して修習の門と為す。疏に

唯だ『起信』のみ……下は、二に深を顯わすなり。真如三昧とは、『論』に云く、「若し止を修せんとせば、静処に住し、端坐して意を正し、氣息にも形色にも依らず、空にも地水火風にも見聞覚知にも依らず、乃至、是の如き三昧に依るが故に、則ち法界は一相なりと知る。謂く、一切諸仏の法身と衆生の身と平等無二にして、即ち一行三昧と名づく。当に知るべし、真如は是れ三昧の根本なり。若し人修行せば、漸漸に能く無量三昧を生ず」と。釈して曰く、此の一段の止の門、始有り終有り、魔を簡び偽を簡び、能を顯わし益を顯わす。義意の門戸、一切周円す。故に諸教と異なる。諸教は但だ義を説くのみ。三根：雖もとは、問う、三觀各おの名目有り。何以に復た円覺の觀門と云うや。故に此の答に三根等：雖もと云うなり」(同二三五右七)。

(4) 『起信論』……前注参照。『起信論』の原文は、わずかな語句の相違や省略があつて、次のように言う。「若し止を修せんとせば、静処に住し、端坐して意を正し、氣息にも依らず、形色にも依らず、空にも依らず、地水火風にも依らず、乃至、見聞覚知にも依らざれ。一切の諸想を念に随つて皆な除き、亦た除想をも遣れ。一切の法は本来無相なるを以て、念念に生ぜず、念念に滅せざればなり。亦た心外に随つて境界を念じて後に、心を以て心を除くことをも得ざれ。心にして若し馳散せば、即ち當に撰め來つて正念に住せしむべし。是の正念とは、當に知るべし、唯心のみにして外の境界無きをいう、即ち復た此の心にも亦た自相も無くして、念念不可得なればなり。若し坐より起つて、去來進止に施作する所有るも、一切時に於て常に方便を念じ隨順して觀察せよ。久しく習して淳熟すれば、其の心は住することを得ん。心が住するを以ての故に、漸漸に猛利にして、隨順して真如三昧に入ることを得、深く煩惱を伏して、信心は增長し、速に不退を成ぜん。唯だ疑惑と、不信と、誹謗と、重罪業の障と、我慢と、懈怠とのみを除く。是の如き等の人は入ること能わざる所なればなり。復た次に、是の如き三昧に依るが故に、則ち法界は一相なりと知る。謂く、一切の諸仏の法身と衆生身とは、平等無二なれば、即ち一行三昧と名づくる。當に知るべし、真如は是れ三昧の根本なり。若し人修行せば漸漸に能く無量三昧を生ず」(岩波文庫本九四〇六頁)。

(5) 『金剛三昧經』……大正藏經卷一五所収の失訳『仏説金剛三昧本性清淨不壞不滅經』一卷を指すのではなく、八世紀中頃に達摩の「二入四行説」を主張する東山法門の人々によって偽作された、大正藏卷九所収の失訳『金剛三昧經』をさす。この經の成立に關しては、水野弘元「達摩の二入四行論と金剛三昧經」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』三号、一九五五年三月)および柳田聖山『初期禪宗史書の研究』(前掲書)参照。その無生行品に「心王菩薩言く、禪は能く動を撰む。諸の幻亂を定む。云何が禪ならざる、と。仏言く、菩薩の禪は即ち是れ動、不動不禪は是れ無生禪なり。禪の性は無生なり。禪相を生ずるを離る。禪の性は無住なり。禪動に住まるを離る。若し禪性は動靜有ること無きを知らば、即ち無生を得。無生の般若も亦た住に依らず。心も亦た不動なり。是の智を以ての故に。故に無生般若波羅密を得」(大正九一三六八の)とあるに依る。

(6) 『法句經』……大正藏經卷四・本緣部所収の法救(Dharmatrāta)造『法句經』ではなく、七世紀前半に偽作された敦煌本の『法句經』をさす。この經の成立については、水野弘元「偽作の法句經について」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』一九号、一九六一年三月)に詳しい。この引用はその普光問如來慈傷答品に「若し諸の三昧を学せば、是れ動にして坐禪に非ず、心は境界に随つて流る、云何が名づけて定と為さんや」(大正八五一四三三五の)とあるに依る。『大疏鈔』卷三上には、天台の藏通別円の四教の通教の説を釈

する中に「通教の意は三を融ずると言うは、融じて空寂に至る。故に云く、『法句経』に云く、戒性は虚空の如し、持する者は、迷倒と為す八仏戒なり。若し諸の三昧を学せば、是れ動にして坐禪に非ず、心は境界に随つて流る、云何が名づけて定と為さんや八仏定なり。智無く得無きを方めて真智と名づく。般若無知にして、智双寂の如き等八仏慧なり。皆な意は三を融ずるなり」(続蔵卷一四一・二六一右)とあって、この『法句経』の説を仏の定としている。なお、この句は、『神会語録』にも引用される。「和上、澄禪師に問う、「何の法を修して見性することを得るや」。澄禪師答えて曰く、「先ず須らく坐を学び定を修すべし。定を得て已後に、定に因りて慧を發す。智慧を以ての故に、即ち見性を得」。問うて曰く、「定を修するの時、豈に作意を要須いざらんや」。答えて言く、「是なり」。問うて曰く、「既にはれ作意ならば、即ち是れ識定なり。若為が見性することを得ん」。答う、「今ま見性と言うは、定を修するを要須う。若し定を修せざれば、若為が見性せん」。問うて曰く、「今ま定を修するは、元より是れ妄心なり。妄心をもて定を修す。如何ぞ定を得ん」。答えて曰く、「今ま定を修して定を得るは、自ら内外の照有り。内外の照を以ての故に、淨を見ることを得。心淨なるを以の故に、即ち是れ見性するなり」。問うて曰く、「今ま見性と言うは、性に内外無し。若し内外の照に因るが故にと言わば、元より妄心を見る。若為ぞ見性せん。經に云く、『若し諸の三昧を学せば、是れ動にして坐禪に非ず。心は境界に随つて流る、云何が名づけて定と為さんや』と。若し此の定を指して是と為さば、維摩詰は即ち舍利弗の宴坐を訶すべからざるなり」(『鈴木大拙全集』卷三・二五三頁)。これらの説から考えると、北宗禪の修定主義を批判した神会の説を宗密が継承していることが理解される。

(7) 『浄名』……『維摩経』弟子品に「夫れ宴坐とは、三界に身意を現するにあらず、是れを宴坐と為す。滅定より起たずして、而も諸々の威儀を現す、是れを宴坐と為す。……煩惱を断ぜずして涅槃に入る、是れを宴坐と為す。若し能く是の如き坐は仏の印可する所なり」(大正一四一・五三九c)とあるに依る。前注の『神会語録』で舍利弗の説く宴坐が否定されたところを参照されたい。

(8) 三界の空花。『首楞嚴経』卷六の偈に「三界は空花の若し」(大正一九一・一三二a)とある。『円覚経』の「彼の病目の空中の花及び第二月を見るに譬う。善男子よ。空に実には花無し。病者は妄執す」(大正一七九・一三三b)を『大疏』卷上四に『首楞嚴経』の偈を含めて釈す。「解して曰く、譬眼の空裏を觀るに、華無きに妄に華を見る。目を捏めて月輪を望み、月辺に別に月を見る。空華と幻月とは、皆な妄見に喩う。衆生一念迷心にして自ら円明の覺性を譬して、而も円明の体上に於て妄に生滅の身心を見る。故に空に實に華無し、病者は妄執すと云う。妄執の言は、正に前の妄認の語に對す。若し真如無相を悟らば、但だ是れ一心なり。空は本より華無く、天は唯だ一月なるのみが如し。故に『首楞』に云く、見聞は幻譬の如く、三界は空華の如し。聞も復すれば譬根除き、塵銷ゆれば覺円淨せん」(続蔵卷一四一・一三三左上下)。

(9) 四生。『円覚経』に「若し諸の世界、一切の種性は、卵生・胎生・濕生・化生なり。皆な婬欲に因りて性命を正す。当に知るべし、輪廻は愛を根本と為す」(大正一七九・一六b)とあり、四生は卵生・胎生・濕生・化生をいう。『大疏』卷中三(続蔵卷一四一・一六二左)参照。生まれ方を四つに分類し、鳥のように卵から生まれるもの、哺乳動物のように母胎から生まれるもの、水中の微生物のようになじめじめした所から生まれるものをいう。やや判りにくいのが化生だが、宗密は「化生は即ち無よりして而も忽ち有るを化と為す」と釈し、また「六道に配せば、天及び地獄」と言っている。過去の業の力によりて忽然として生まれるものをいう。

(10) 修して而も無修^二二段に「無修之修」とあるが、高山寺本や朝鮮本は「修而無修」に作る。無修の内容は、次文と考えてよいであろう。

(11) 前に難じて……^一一六段参照。

(12) 管を以て……^二『莊子』秋水篇の「用管闕天」等に基づく成語。視野狭窄の喩え。『大疏』卷上三に「管もて窺えば、信解生じ難し」(統藏卷一四—一二七左下)とある。

〔三三〕 絶対の真心

(1) 然此教中、以一真心性、對染淨諸法、全揀全收。全揀者、如上所說、但尅體直指靈知即是心性、餘皆虛妄。故云非識所能識、亦非心境界等、乃至非性非相、非佛非衆生、離四句絕百非。全收者、染淨諸法無不是心、心迷故妄起惑業、乃至四生六道、雜穢^{*}國土、心悟故從體起用、四智^{*}六度、乃至四辨^{*}十力、妙身淨利、無所不現。既是此心現起諸法、故^{*}法法全即真心。如人夢所現事、事事皆人。如金作器、器器皆金。如鏡現影、影影皆鏡。夢喻^{*}妄想業報、器喻^{*}修行、影喻^{*}應化。故華嚴云、知一切法即心自性、成就慧身、不由他悟。起信論云、三界虛偽、唯心所作、離心則無六塵境界、乃至一切分別、即分別自心、心不見心、無相可得、故一切法如鏡中

然るに此の教の中にては、一真心性を以て、染淨の諸法に対し、全揀全收す。

全揀すとは、上に説きし所の如く、但だ剋體^{そのま(1)}に靈知は即ち是れ心性にして、余は皆な虚妄なりと直指す。故に識の能く識る所に非ず、亦た心の境界に非ず等、乃至、性に非ず相に非ず、仏に非ず衆生に非ず、四句を離れ百非を絶すと云うなり。⁽²⁾全收すとは、染淨の諸法は是れ心ならざる無し、⁽³⁾心迷うが故に、妄りに惑業を起こし、⁽⁴⁾乃至、四生六道、⁽⁵⁾雜穢の國土あり、心悟るが故に、体より用を起こし、⁽⁶⁾四智六度、乃至、⁽⁷⁾四弁十力、妙身淨利、現ぜざる所無し。既に是れ此の心の諸法を現起するものなれば、故に法法は全く即ち真心なりとす。人の夢に現わるる事は、事事皆な人なるが如く、金もて器を作れば、器器皆な金なるが如く、鏡に影を現わせば、影影皆な鏡なるが如し⁽⁸⁾。夢は妄想業報に喩え、器は修行に喩え、影は應化に喩う。故に『華嚴』に云く、「一切の法は即ち心の自性なりと知らば、慧身を成就して、他に由つて悟らず⁽⁹⁾」と。『起信論』に云く、「三界は虚偽にして、唯だ心の所作なるのみ、心を離るときは則ち六塵の境界無し、乃至、一切の分別は即ち自心を分別するなり、心にして心を見ずんば、相として得べきもの無し。故に一切の法は鏡中の像の如し⁽¹⁰⁾」と。『楞伽』に云く、「寂滅とは名づけて一心と為す。一心とは如来藏と名づく。能く遍く一切の趣生を興造し、善を造

像。楞伽云、寂滅者名一心。一心者名如來藏、能遍興造一切趣生、造善造惡、受苦樂、與因俱。故知一切無非心也。

(2) 全揀門攝前第二破相教、全收門攝前第一說相教。將前望此、此則迥異於前。將此攝前、前則全同於此。深必該淺、淺不至深。深者直顯出真心之體、方於中揀一切収一切也。如是收揀自在、性相無礙、方能於一切法、悉無所住。唯此名爲了義。

(3) 更有心性同異、頓漸違方、及所排諸家言教、部帙次第、述作大意、悉在下卷。禪源諸詮集都序卷上

り悪を造り、苦樂を受けて、因と俱なり」と。故に知る、一切は心に非ざる無しと。

全揀門は前の第二の破相教を撰し、全収門は前の第一の説相教を撰す。前を將つて此れに望むときは、此れは則ち廻かに前に異なり、此れを將つて前を撰するときは、前は則ち全く此れに同じ。深は必ず浅を該ぬるも、浅は深には至らず。深ならば直に真心の体を顯出して、方て中に於て一切を揀び一切を収むるなり。是の如く収と揀と自在にして、性と相と無礙ならば、方て能く一切の法に於て、悉く所住無けん。唯だ此れをのみ名づけて了義と為す。

更に心と性との同異、頓と漸との違方、及び排する所の諸家の言教、部帙の次第、述作の大意有り、悉く下巻に在り。

禪源諸詮集都序 卷上

*能ニナシ(高)(弘)(明)。*亦ニナシ(高)(弘)(明)。*界ニナシ(高)(弘)(明)。*非ニ非也(高)(弘)(明)。*土ニ界(高)(弘)(明)。*智ニ等(高)(弘)(明)。*辨ニ辯(高)(弘)(明)。*故法ニ諸(明)。*入喻ニ對(明)。*則ニ即(弘)。*法ニ諸法(高)(弘)。*像ニ相(明)。*伽ニ伽經(高)(弘)。*名ニ名爲(高)(弘)(明)。*遍ニ徧(明)。*樂ニ受樂(明)。*方ニ妨(高)(弘)(明)。*禪ニ禪(以下欠(高))。*都序ニ序(底)ニナシ(弘)。*上ニ上之二(明)。

(1)とところがこの顯示真心即性教の中では、染と淨との諸法に対して、一真心性によって「全てを揀てさり」「全てを収めとる」のである。「全てを揀てさり」とは、上に説いてきたように、ただそのままに靈知は心性であってその他は皆な虚妄である、と直指するものである。それ故に、意識で認識できるものではなく、心の対境となる世界でもない等と言ひ、さらに性でもないし相でもない、仏でもないし衆生でもない、四句を離れ百非を絶している、などと言うのである。いっぽう「全てを

収めとる」とは、染と浄との諸法は心でないものは無い、心が迷うから妄りに惑業が起り、四生六道、雑穢の国土さえあることになり、心が悟るから体から用が起り、四智六度、さらに四弁十力、妙身淨刹さえも、現わさないものは無いことになるのである。かくてこの心が諸法を現わし起すのである以上、一つ一つの法もつが全て真心であるということになるのである。たとえば、人の夢に現われる事は一つ一つの事が皆なその人の中の事であり、また、金で器を作るとすれば一つ一つの器が皆な金であり、また、鏡で影すがたを映し出せば、一つ一つの影が皆な鏡であるようなものである。人夢は妄想や業報に喩え、器は修行に喩え、影は応化に喩える。それ故に『華嚴經』に、「一切の法が心の自性であると知るならば、智慧身が完成される。他者によって悟ることはない」と言う。また、『起信論』にも、「三界は虚偽であって、ただ心を作り出しただけのものである。心を離れるときには六塵の対境世界は無いし、さらに一切の分別は自心を分別しているのであって、心が心を見なければ獲得される相も無いのである。それ故に一切の法は鏡の中に映った像のようなものである」と言う。また、『楞伽經』にも、「寂滅を一心と名づける。その一心は如来蔵とも名づけ、遍く一切の衆生を造り、善・悪を造り、果として苦・楽を受けて、因と随順している」と言う。そのことから、一切は心でないものは無い、と知るのである。

(2) 全揀門は前の第二の破相教を包摂し、全取門は前の第一の説相教を包摂する。前の二教でこの第三の教えを望むときは、第三ははるかに前に異なっているが、第三で前の教えを包摂するときは、前の教えは全くこの第三に同じなのである。深いものは必ず浅いものを包摂するけれども、浅いものは深いものには至らない。深いものはズバリと真心の本体を顕し出す。そうして始めてその中で一切を揀すてさり一切を収めとれるのである。このように「収めとること」と「揀すてさること」とを自在にし、性と相と無礙であるならば、そこで始めて一切の法もつにおいて、全くとらわれることがなくなるであろう。これをこそ了義と名づけるのである。

(3) 更に心と性とは同じか異なるのか、頓と漸とは矛盾するのか、と言ったことや、列挙された諸家の言教や、この書物の順序次第や、その述べようとすする真意などは、全て下巻に収めている。

『禅源諸詮集都序』 卷上

(1) 剋体二そのものずばりに、ものそのものとして、の意。四〇段および『裴休拾遺問』(前掲論文四五頁)にも同じ用例がある。

(2) 靈知……二四段の直顯心性宗および二九段の顯示真心即性教について、「知」を根源においてその特色が述べられた。全揀とは、その絶対の知を根拠として他のすべてを否定することである。二四段の注(3)(4)で述べたように、宗密は、靈知〓真性〓心性とし、それ故に二九段では、「靈知の心は即ち是れ真性にして、仏と異なること無し」として、『華嚴經』菩薩問明品の「識の能く識る所に非ず、亦た心の境界に非ず」を引き、二七段の密意破相顯性教では、真性は無いわけではないが、それをとりあえず無いとして、虚妄の相に執着している衆生の説を破するのだと述べている。その否定を四句を離れ百非を絶すという。四句は、有、空、亦有亦空、非有非空の四句分別をいい、また、諸法の不生を説く自・他・共・無因をさすこともある。百非は、生滅・来去・一異・断常について無数に否定を重ねることをさす。三論宗の吉蔵は、『三論玄義』に「夫れ道の状為るや、体は百非を絶し、理は四句を超ゆ。之れを言わば、其の真を失い、之れを知らば、其の愚に反り、之れを有とすれば、其の性に乖き、之れを無とすれば、其の体を傷つく」(大正四五一二〇)という。また、『妄尽還源觀』にも「百非は其の攀絶を息め、四句は其の増減を絶す」(同——六三七a)とある。

(3) 全収す……迷いの世界も悟りの世界もその根源である真心に基づくことを全収とし、全揀門で否定されたすべてを全収門で絶対の真心に包摂する。この全揀と全収をくりかえして、儒教や道教をも含めた仏教の一心による体係を構築したところに宗密の説の特色がある。『大疏』卷上二に十門分別の第四の分齊幽深が説かれるが、その文に「今ま論の染浄の諸法を明かし、本より末に至りて略して五重有りと約して、以て諸宗の分齊の浅深を顯わす」(統藏卷一四——一六左)とあり、『大疏鈔』卷三上に「染浄の法とは、論中に流に反り源に還るを以て浄法と為すが故に。流に順いて展転生起するは即ち是れ染なり。又た仏は教を説いて、本は染機と為し、教を聞いて展転して之れを翻すを即ち浄と為すなり。本より末に至るが故にと云うは、若し一心真如を以て本と為さば、本は即ち染に非ず浄に非ず。若し根本不觉を約して本と為さば、則ち本末俱に染なり。今ま皆な之れに通ず」(同——二六四右上下)と釈す。五重とは、一に唯だ一心のみを本源と為す、二に一心に依りて二門を開く、三に後門に依りて二義を明かす、四に後義に依りて三細を生ず、五に最後に依りて六麤を生ず、の五つを言う。

(4) 惑業〓二五段参照。貪瞋痴等の惑とこの惑によって引き起こされた善悪の業をさし、その結果として三界の苦報を受けるといふ。

(5) 四生六道〓四生は前段の注(9)の卵生・胎生・濕生・化生をいい、六道は二五段にもあるように、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天をいう。

(6) 四智六度〓二五段に説く。四智とは四智菩提の成所作智・妙觀察智・平等性智・大円鏡智をいい、六度は布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧をいう。六度は三段の注(9)に既出。

(7) 四弁十力〓四弁は菩薩が説法する時に、智と弁説の自在無礙なることで、法・義・詞・楽説の四無礙弁をいい、四無礙智ともいう。『大疏』卷中二(統藏一四——一四九左)および『大疏鈔』卷八上の四無礙弁章(同——三七六右上下七右下)参照。十力は『智度論』卷二四に①処不是処智力・②業報智力・③禅解脱三昧智力・④上下根智力・⑤種種欲智力・⑥種種性智力・⑦一切至処道智力・⑧宿命智力・⑨生死智力・⑩漏尽智力とあり(大正二五——二三六c)、『華嚴經』卷五六離世間品には、①深心力・②増上深心力・③方便力・④智力・⑤願力・⑥行力・⑦乘力・⑧神變力・⑨菩提力・⑩転法輪力とあるが(大正一〇——二九五bc)、他説もあって必ずしも一致

していない。宗密が『大智度論』の説で詳細に説いたところが、『大疏』卷中二（続藏一四一―一四九右下）および『大疏抄』卷八上の十力章（同一三七―四左下）に存す。

(8) 既に是れ此の心……注(3)の五重の第二を、『大疏』卷上一は『起信論』にもとづきつつ次のように積す。「二は、一心に依りて二門を開く。一は、心真如門なり。即ち是れ一法界にして、大総相、法門の体なり。所謂る心性の不生不滅なり。一切の諸法は、唯だ妄念に依りてのみ差別有るも、若し心念を離るるときは、則ち一切の境界の相無ければなり。乃至、唯だ是れ一心なるが故に真如と名づくは是の空華を知るは、即ち輪転無し。乃至、法界性の如き等なり。二は、心生滅門なり。謂く、如来蔵に依りて故に生滅心有り。所謂不生不滅と生滅と和合して一に非ず異に非ず、阿梨耶識と名づくは五名中の一を如来蔵と名づく。自性差別及び種種に覺心より生ずと云う等なり。また『大疏妙』卷三上には次のように積す。「一心法に依りて二種の門有り。云何が二と為す。一は心真如門なり。二は心生滅門なり。謂く、一如来蔵心は、含んで二義有り。一に体に約して相を絶つ義。即ち真如門なり。謂く、染に非ず淨に非ず、生に非ず滅に非ず、動ぜず転ぜず、平等一味にして、性に差別無し。衆生は即ち涅槃にして、滅を待たざるなり。凡夫と弥勒とは、同一の際なり。二に、縁に隨いて滅を起こす義。即ち生滅門なり。謂く、薫に隨つて轉動して、染淨を成す。染淨は成ると雖も、性は恒に不動なり。正しく不動に由りて能く染淨を成す。是の故に不動も亦た動門に在り。『勝鬘』中に不染にして染なり等。『楞伽』に云く、如来蔵を阿梨耶識と名づく。而して無明と七識と共に俱なり。大海の波の常に断絶無きが如きなり等。余は別卷の如し。是の二種の門、皆な各おの総じて一切法を撰すは真如（門）は是れ染淨の通相を以てし、通相の外に別の染淨無し。故に総じて一切諸法を撰することを得。生滅門中に別に染淨を顯わす。染淨の法は、該ねざる所無きが故に。亦た総じて諸法を撰す。通と別と殊ると雖も、齊しく遺す所無し。故に各おの撰すと云う。此の義は云何。是の二門は相離れざるを以ての故に、金の全て器を収めるが如く、器も亦た全て金を収むなり。』（同一二六四左上）。

(9) 『華嚴』に云く……『華嚴經』卷一七の梵行品（大正一〇一―八九a）に依る。

(10) 『起信論』……『起信論』の「是の故に、三界は虚偽にして唯だ心のみの所作なり、心を離るときは則ち六塵の境界無し。此の義は云何。一切の法は皆な心のみより起り、妄念より生ずるを以て、一切の分別は即ち自心を分別するなり、心にして心を見ずんば、相として得べきもの無し。当に知るべし、世間の一切の境界は、皆な衆生の無明妄心に依りて任持することを得るなり。是の故に、一切の法は鏡中の像の体として得べきもの無きが如く、唯心のみにして虚妄なり、心にして生ずるときは則ち種種なる法は生じ、心に滅するときは則ち種種なる法は滅するを以ての故なり」（岩波文庫本四〇―四二頁）による。

(11) 『楞伽』に云く……鎌田本に指摘するように、菩提流支訳十卷本の『入楞伽經』卷一請仏品第一と求那跋陀羅訳四卷本の『楞伽阿跋多羅宝經』卷四一切仏語心品第四を合糅した説。前者の「寂滅者名爲一心。一心者名如来蔵」（大正一六一―一五九a）の語については、一八段に既出してあり、その注(15)と三段の注(6)を参照。後者も「仏告大慧、如来之蔵是善不善因。能遍興造一切趣生」（同一五一―〇b）と「大慧。如来蔵者、受苦樂与因俱。若生若滅」（同一五一―二b）の二文を結合させたものであり、同文の引用は『斐休拾遺問』（前掲論文三四頁）にあり、また、前者は『大疏』卷上四（続藏一四一―一三五左下）にも引用がある。

(12)

全揀門は……『原人論』は二九段の注(1)に引用した一乘顯性教を「直顯真源第三」とし、それを「仏了義実教」と呼んだ。一乘顯性教とは、『都序』の顯示真心即性教に相当するが、この一乘顯性教を深い教えとして全揀・全取して、『原人論』は「会通本末第四」で次のように言う。「本末を会通する第四八前に斥く所を会して同じく一源に帰し、皆な正義と為す。眞性は身の本と為すと雖も、生起は蓋し因由有り。端無くして忽ち身相を成すべからず。但だ前宗の未了に縁のみ。所以に節節之れを斥く。今ま將に本末をもて会通せんとす。乃至、儒・道も亦た是れなり。△初めは唯だ第五の性教のみ説く所にして、後段より已去、節級方めて諸教に同せず。各おの注に説くが如し。謂く、初めは唯一眞の靈性は不生不滅、不増不減、不變不易なり。衆生は無始より迷睡して、自ら覺知せず。隱覆に由るが故に如来蔵と名づく。如来蔵に依るが故に、生滅の心相有り。△此れより方めて是れ第四の(破相)教も亦た同じ、此の前の生滅の諸相を破るなり。所謂る不生滅の真心と生滅の妄想と和合して一に非ず異に非ず、名づけて阿頼耶識と為す。此の識は覺と不覺の二義有り。△此れより下は方めて是れ第三の法相教の中も亦た同じく説く所なり。不覺に依るが故に、最初の念を動かすを名づけて業相と為す。又た此の念の本より無なるを覺せざるが故に、轉じて能見の識及び所見の境界の相い現ずることを成す。又た此の境は自心より妄に現ずることを覺らず、執して定有と為すを名づけて法執と為す。△此れより下は方めて是れ第二の小乗教の中も亦た同じく説く所なり。此れ等を執するが故に、遂て自他の殊りを見て、便ち我執を成す。我相を執するが故に、順情の諸境を貪愛し、以て我を潤さんと欲し、違情の諸境を瞋嫌して、相い損惱せんことを怒る。愚痴の情、展轉して增長す。△此れより下は方めて是れ第一の人天教の中も亦た同じく説く所なり。故に殺盜等の心神、此の惡業に乗じて、地獄鬼畜等の中に生ず。復た此の苦を怖るる者、或は性善なる者有りて、施戒等を行じ、心神此の善業に乗じて、中陰に運び、母胎の中に入る。△此れより下は方めて是れ儒・道の二教も亦た同じく説く所なり。氣を稟けて質を受く△彼の説く所の氣を以て本と為すを會す。氣は則ち頓に四大を具し、漸に諸根を成す。心は則ち頓に四蘊を具し、漸に諸識を成す。十月満足して生じ来るを人と名づく。即ち我等が今の身心是れなり。故に知りぬ、身心は各おの其の本有り。二類和合して方めて一人を成す。天修羅等も大いに此に同じ。然るに、引業に因りて此の身を受得すと雖も、復た滿業に由るが故に、貴賤・貧富・寿夭・病健・盛衰・苦樂あり。謂く、前生の敬慢を因と為して、今ま貴賤の果を感ず。乃至、仁は寿、殺は夭、施は富、慳は貧、種種の別報は具さに述べべからず。是を以て此の身は、或は惡無くして自ら禍し、善無くして自ら福し、不仁にして寿、不殺にして夭等の者有り。皆な是れ前生の滿業已に定るが故に、今世の所作に因らずして、自然に然るが如し。外学の者は、前世を知らず、但だ目覩に抛りて唯だ自然のみを執す△彼の説く所の自然を本と為すを會す。復た前世に少者は善を修し、老いて惡を造り、或は少くして惡、老いて善なるもの有り。故に今世少小にしては富貴にして樂しみ、老大にしては貧賤にして苦しむ、或は少にして貧苦、老にして富貴等あり。故に外学の者は、知らず、唯だ否泰は時運に由りて執することを△彼の説く所の皆な天命に由るを會す。然れども、稟くる所の氣は、展轉して本を推せば、即ち混一の元氣なり。起こす所の心、展轉して源を窮むれば、即ち眞一の靈心なり。実を究めて之れを言わば、心外的に別法無し、元氣も亦た心の所変に従いて、前の轉識所現の境に属す。是れ阿頼耶の相分の撰する所にして、初一念の業相より分れて心・境の二と為るなり。心既に細より麁に至り、展轉して妄計し、乃至、業に造る△前に叙列するが如し。境も亦た微より著に至り、展轉して變起し、乃至、天地あり△即ち彼れ始め太易

より五重運轉して、乃至、太極あり。太極、兩儀を生ず。彼の自然の大道と説くは、此に真性と説くが如く、其の実は但だ是れ一念の能変の見分なり。彼の元氣と云うは、此に一念の初動の如く、其の実は但だ是れ境界の相なり。業既に成熟すれば、即ち父母より二氣を稟受し、業識と和合して、人身を成就す。此に拠れば則ち心識所變の境にして乃ち二分と成る。一分は即ち心識と和合して人と成り、一分は心識と和合せずして即ち天地山河国色と成る。三才の中に唯だ人靈なるは、心神と合するに由る。仏、内の四大と外の四大と同じからずと説くは正しく是れ此れなり。哀しき哉、寡学にして異執紛然たり。語を道流に寄す。成仏せんと欲する者は、必ず須らく麤細、本末を洞明して方めて能く末を棄て本に歸し、心源を反照すべし。麤尽き細除きて靈性現前せば、法として達せざる無きを法・報身と名づけ、自然に応現無窮なるを化身仏と名づく」(鎌田本一〇三〜一七頁)。さらにこの会通本末に至った理由について、次のように言う。「評に曰く、我等多劫より未だ真宗に遇わず。自に反りて身を原ぬることを解せず。但だ虚妄の相に執し、凡下を甘認して、或は畜、或は人とす。今、至教に約して之れを原ねて、方めて本来是れ仏なることを覚る。故に須らく行は仏行に依り、心は仏心に契い、本に返り源に還りて、凡習を断除し、之れを損して又た損し、以て無為に至れば、自然に応用恒沙なるべし。之れを名づけて仏と曰う。当に知るべし、迷と悟とは同一の真心なることを。大なる哉、妙門の原人は此に至る人然るに、仏は前の五教(人天教・小乗教・大乘法相教・大乘破相教・一乘顕性教)を説くに、或は漸、或は頓、若し中下の機有れば、則ち浅より深に至り、漸漸に誘接す。先ず初教を説いて悪を離れて善に住らしめ、次に二三を説いて染を離れて浄に住らしめ、後の四五を談じて相を破し性を顕わし、権を会して実を歸す。実教に依つて修すれば、乃至、成仏す。若し上上根智ならば、則ち本より末に至る。謂く、初めより便ち第五に依りて頓に一真の心体を指す。心体既に顯わるれば、自ら一切皆な是れ虚妄にして、本来空寂なることを覚す。但だ迷を以ての故に、真に託して起こる。須らく真を悟るの智を以て、悪を断じ善を修し、妄を息め真に歸すべし。妄尽き真円なる是れ法身仏と名づく」

(鎌田本一〇〇頁)。

(13) 下巻『都序』が二巻本であったことは明藏本も同じ。明藏本が上・下をさらに二分して四巻本にしたのはあくまでも便宜上のことである。(以下つづきは『論集』第二十八号に掲載予定)